

富田林市遺跡調査会報告26

新 堂 廃 寺 跡

宅地造成に伴う埋蔵文化財調査報告

2005.6.30

富田林市遺跡調査会

はじめに

この度、報告します新堂廃寺跡は、大阪府下でも最も古い時期に造られた古代寺院であり、その周辺にあるオガソジ池瓦窯跡とお龜石古墳とともに平成14年度 国の史跡指定になりました。これらの調査成果は既に報告されております。特に瓦の分析方法は注目され、現在、京都大学博物館において、その研究方法が新堂廃寺跡から出土した瓦とともに展示されています。

今回の調査は、国史跡指定されている新堂廃寺跡寺域のすぐ西側に隣接する土地であります。調査成果としては、東側に庇が付く大型の掘立柱建物が検出され、建物の柱穴の中には新堂廃寺で使われていた瓦と同様の瓦が埋置された状態で見つかり、寺との関係が深い集落であることが確認されました。

この他にも、瓦を利用して作られた井戸状の遺構なども見つかり、新堂廃寺とその周辺に生きた人々の生活が少しずつ明らかになっていくことと思います。

最後になりましたが、現地調査にご協力・ご尽力いただいた開発業者や地域住民の方々を始めとして多くの方々に感謝いたします。

平成17年6月

理事長 堂山博也

例　　言

1. 本書は、富田林市緑ヶ丘町における宅地造成に伴い富田林市遺跡調査会が平成16年度に緊急発掘調査を行った新堂廃寺跡の調査報告である。
2. 現地調査は、藤田徹也が担当し、平成16年6月に着手し、10月に終了した。内業整理は、一部現地調査と並行して行い、平成17年6月末日終了した。
3. 現地調査にあたっては、酒井健治・関本優美子・高村勇士・竹本見・長原弘樹・平野京美・水久保祥子・山下まどかの協力を得た。また、内業整理については主に栗田薫が担当し楠木理恵・前野美智子・瀬戸直子の協力を得た。
4. 現地写真撮影は、藤田徹也が行った。
5. 本書は、「第V章 出土遺物」については栗田薫が執筆し、それ以外を藤田が執筆した。編集は藤田が行った。
6. 本書で使用した方位は国土座標IV系に基づく座標北を表示し、標高は東京湾標準海面値(T.P)で表示した。また、現地調査における土色の色調については小山・竹原編『新版標準土色帳』を使用した。
7. 出土遺物および各種記録類は富田林市立埋蔵文化財センターで保管している。
8. 調査の実施および本書の作成にあたっては、北野耕平氏（神戸商船大学名誉教授）、竹谷俊彦氏（元農中市埋蔵文化財遺跡発掘調査団調査員）に有益なご助言・ご協力を頂きました。記してここに感謝の意を表します。

目 次

本文目次

はじめに

例言

目次

第Ⅰ章	調査に至る経過	1
第Ⅱ章	調査の方法	2
第Ⅲ章	遺跡の位置と環境	3
第Ⅳ章	調査の成果	
	1 基本層序	5
	2 A区	6
	3 C区	8
	4 E区	10
第Ⅴ章	出土遺物	12
第Ⅵ章	まとめ	28

写真目次

写真1	調査区前風景（南西から）	1
写真2	調査区周辺写真（南から）	1
写真3	A区北壁断面写真	5
写真4	C区西壁断面	5
写真5	土壤3検出状況	7
写真6	土壤3断ち割り状況	7
写真7	C区全景	8
写真8	P16南側柱痕確認状況	8
写真9	掘立柱建物6	13
写真10	瓦積み暗渠	13

図版目次

図1	調査区配置図	2
図2	調査区位置図	4
図3	A区断面模式図	5
図4	A区構造平面図	6
図5	P1・土壤1断面図	6
図6	土壤2断面図	7
図7	土壤3立面図	7
図8	溝3断面図	8
図9	C区掘立柱建物平面図	9
図10	溝4断面図	9
図11	B～E区構造平面図	10
図12	溝13・14・土壤5断面図	12
図13	A区土壤3出土土器	19
図14	A区土壤3出土瓦	20
図15	A区土壤3出土瓦	21
図16	C区掘立柱建物1・3・5、P58・65・81、溝4・13・17出土土器	22
図17	C区土壤4出土土器	23
図18	C区土壤4出土土器	24
図19	D区側溝E区掘立柱建物6、溝24出土土器、仏	24
図20	C区掘立柱建物1、土壤4、溝4出土瓦	25
図21	E区掘立柱建物6出土瓦	27
図22	E区掘立柱建物6出土瓦	28
図23	E区溝24、暗渠2出土瓦、地区不明表採瓦	29

第Ⅰ章 調査に至る経過

富田林市緑ヶ丘において宅地造成が計画されたところ、該当地は、新堂廃寺跡と周知されている箇所であった。そのため、富田林市教育委員会は対象地において平成16年6月に試掘調査を行い、事業者と発掘調査区域と盛土による保存域との調整をおこなった。協議の結果、宅地部分においては盛土による保存を行い、下水管などを埋設する道路部分について発掘調査を実施することになった。そこで、市教育委員会は発掘調査を富田林市遺跡調査会に委託することになった。

現地調査は、平成16年7月～10月まで行い、その後、富田林市立埋蔵文化財センターにおいて内業整理作業を平成17年6月末日までおこなった。本書は、その成果報告であり、本書の刊行をもって業務を終了した。



写真1 調査区前風景（南西から）

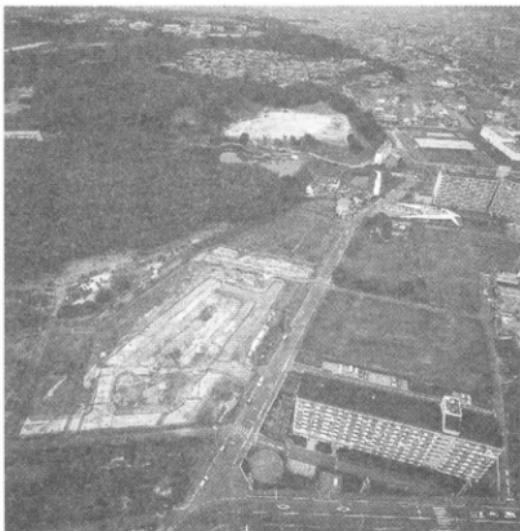


写真2 調査区周辺写真（南から）

第Ⅱ章 調査の方法

今次調査区は、開発のおよぶ私設道路敷きに該当する約2200m²である。

調査は、耕土床土および搅乱の範囲を機械掘削で行い、それ以下を人力掘削でおこなった。調査区範囲と形状や残土置き場と重機の進路方向の関係から、機械掘削は北側の飛び地（A区）から掘削を開始した。その後、調査対象地南側部分を掘削し、順次北側へと移行した。本文において呼称する調査区名は、機会掘削を行った箇所を順番に便宜上の地区分けを行った名称である。なお、D区については、C区とE区を東西につなぐ箇所であるが、遺構面検出後、C・D両区との遺構関係の配慮などから、遺構番号をC区、E区に振り分けて各遺構の呼称をしている。よって、D区出土遺物の呼称は、機械掘削時と人力掘削による遺構面検出時に出土した遺物のみに与えている。なお、調査期間中に3度の台風に見舞われ、調査区壁面や各遺構の掘りかたが崩れ、調査区や各遺構の規模が断面図作成時の規模よりも大きくなっている所が数箇所ある。遺構平面図作製時に校正すべき所ではあるが、後世の作為的行為につながる過度な校正を避けたため、図面上の相違点がみられる結果となった。よって、遺構規模は遺構断面観察の結果を重視していることを明記しておきたい。

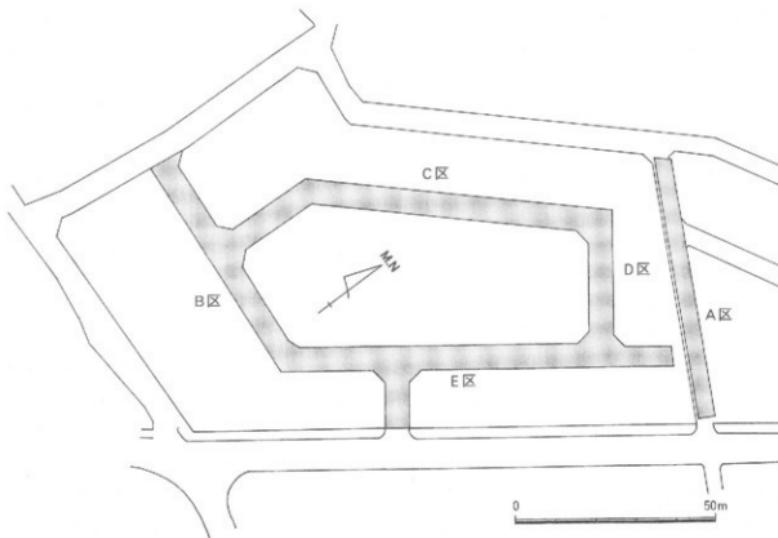


図1 調査区配置図

第Ⅲ章 遺跡の位置と環境

新堂廃寺跡の所在する富田林市は、大阪府南東部にあり東西約6.5km南北約10kmである。西には、羽曳野丘陵、南は和泉山脈から派生する金胎寺山、嶽山が連なる。この丘陵の北側で、金剛山地を源とする佐備川や千早川が和泉山脈を源とする石川と合流し、藤井寺市で西流する大和川と合流する。市域を地形的にみると、西側に広がる羽曳野丘陵と石川右岸に位置する金胎寺山・嶽山などの和泉山脈へと続く山々、そして両者に挟まれた石川沿いの平野部の3つに分けられる。

当遺跡は、石川左岸中位段丘上に位置し、行政区分では富田林市緑ヶ丘町にある。石川左岸中位段丘は、起伏の激しい市内の中で、広い平野部を有する所であり、市内でも遺跡の密度が濃い地区もある。今次調査区は、中位段丘の西端に位置しており、すぐ西側には羽曳野丘陵が南北に広がっている。羽曳野丘陵東裾部には、数基古墳が点在しているが、今次調査区の北側に所在するお危石古墳もその1つである。その東側下方には、オガシジ池瓦窯がある。これらの古墳と瓦窯、そして新堂廃寺跡は、相互に深く関係する遺跡群と知られ、2002年に史跡指定登録がなされている。

今次調査区は、史跡指定されている新堂廃寺跡の道路を挟んで西側に位置する。地形は、巨視的に見ると西の羽曳野丘陵から東の石川に向かって傾斜する傾向にあるが、微視的に見ると、既往の調査で確認されているように（大阪府教育委員会1999）、西側の羽曳野丘陵から東側に派生する尾根状の地形によって、谷状地形や自然流路が多く存在し起伏の激しい土地であった。そういう関係から調査区の地形は、南西方向から北東方向にかけて傾斜する形となる。現在は、中世以降の水田開発に伴いその傾斜は緩くなり、多少の段差はみられるものの、ほぼ平坦な面を形成している。

周辺の遺跡を概観すると、当遺跡の東側に展開する中野遺跡は、弥生時代中期以降、断続的ながら中世まで集落が続き、遺跡の立地や集落の規模から判断して新堂廃寺創建に関わる主体的な集落であると考えられている。市内で確認されている古代遺跡の数は、決して少なくないものの、いずれも短期間もしくは7世紀以降のものが多く、7世紀前半に創建された新堂廃寺の造営主体に成りえるような7世紀以前から古代を通して継続する集落が中野遺跡以外にみられないことも、中野遺跡を造営主体の集落としてみる一因である。

近年、中野遺跡の約500m南に位置する畑ヶ田遺跡や畑ヶ田南遺跡から、縦柱の掘立柱建物が検出されている。畑ヶ田南遺跡の掘立柱建物は、残存率が悪いものの複数並ぶ可能性があり、一種の倉庫群として捉えることもできる。建物の柱穴から7世紀前半に該当する須恵器が出土しており、遺物量が少ないながらも奈良時代から平安時代まで継続する遺跡であることがわかってきた。畑ヶ田遺跡でも奈良時代から平安時代にかけての集落が確認されている。これらの遺跡は、中世段階になると水田開発がなされ、新堂廃寺の廃絶時期と類似する点で興味深い。新堂廃寺の造営主体者の基盤が、中野遺跡から畑ヶ田遺跡付近まで広く点在していた可能性もあるが、これらの評価については今後の調査に委ねたい。

他の遺跡については、2003年発行の市教育委員会『新堂廃寺跡・オガニジ池瓦窯・お龜石古墳』が詳しい。

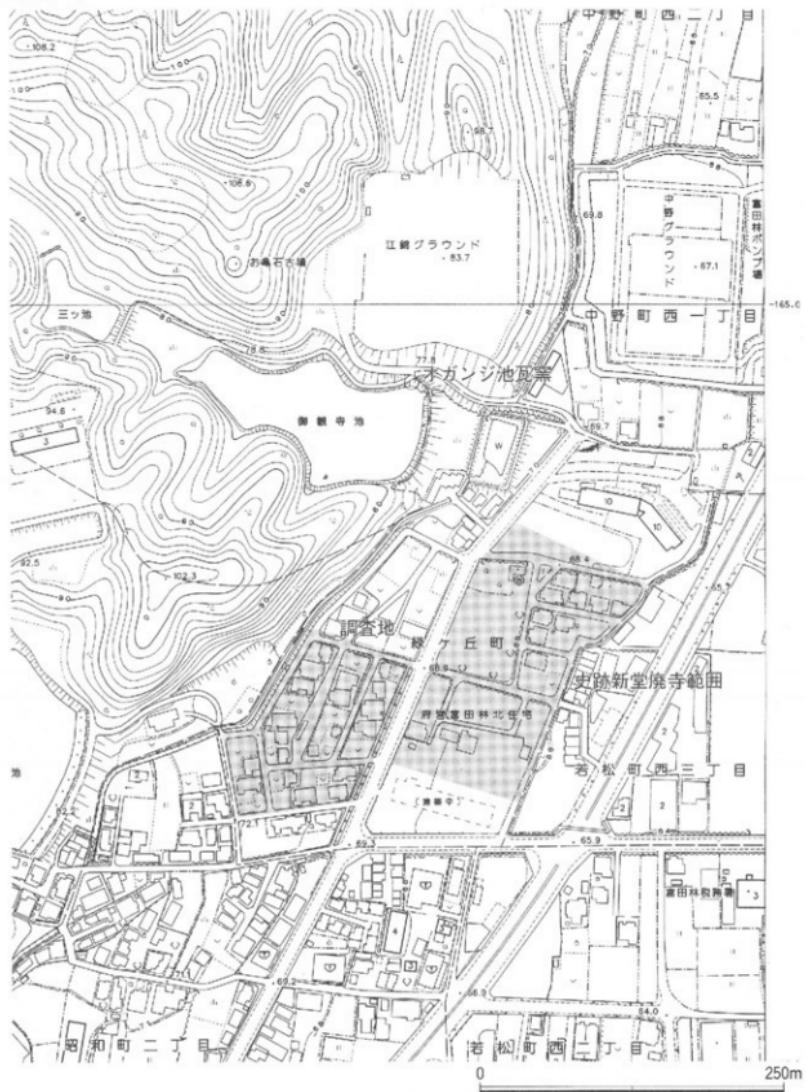


図2 調査区位置図

第IV章 調査の成果

1. 基本層序

今次調査で東西を通して見ることが出来るのは、A区の北壁断面とB区の南壁断面である。B区の南壁断面は、地山直上まで後世の搅乱により破壊を受けている。B区西側の地山面はT.P +72.000m、東側でT.P +69.700mで、西高東低の傾斜をとる。中世以降の耕作化により、段が設けられ、各段の

境には溝が掘り込まれている。また、現代の宅地化による掘削と盛土による整地が行われている。A区の北壁断面では、西側がやや搅乱により破壊を受け地山が削り取られているものの、今次調査区地形の西高東低の状況をよく示している。①層は、現代の盛土である。調査区西側は、①層下で地山が見られる。C区から続く配管設備や、隣接する用水路の工事等に伴い、一部地山面が破壊を受けている。

②層は、現代耕土で、A区中央付近から東側にかけて見られる。本来は西側から続くものと思われるが、現代の整地によって、標高の高い部分は削られている。③と④は、床土に位置付けられるもので、鉄分の沈着度合いから2層に分けているが、性格的には同様のものであると考えられる。

⑤層は旧耕土である。調査区東側では、旧耕土と地山の間に⑥層が確認できる。⑥層は、土壤化の著しい黒褐色系の粘質土である。調査区全域をみると⑤層と⑥層の間に1層入る箇所もあるが、傾斜する地形を平坦にする

ために設けられた整地土であると思われる。東側壁面より約10m先に位置する2000年度の調査では、谷状の地形を埋めて人為的に整地し寺域の拡張を行っている様子がみられるが、⑥層や⑤層と⑥層の間に含まれる整地層は、寺域拡張に伴う整地の痕跡ではなく、耕作化に伴う整地土や自然堆積層が土壤化したものであると考えられる。したがって、寺域拡張による整地の範囲は、今次調査区と史跡範囲の間に通る市道付近でおさまるものと考えられる。

①	現代 盛土
②	10YR5/2 黒褐色（粘土～シルト）耕土
③	2.5Y5/4 黄灰色（シルト～粘土相混）
④	2.5Y5/4 黄褐色（シルト～シルト）
⑤	5Y5/4 深色（粘土～シルト）
⑥	2.5Y5/2 黑褐色（粘土～シルト）

図3 A区断面模式図



写真3 A区北壁断面写真



写真4 C区西壁断面

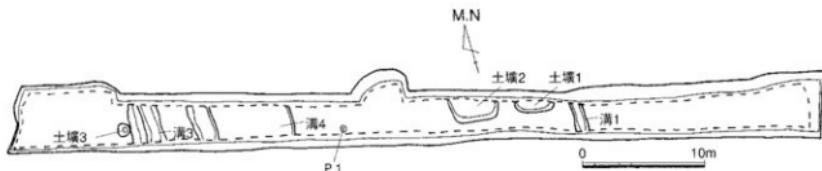


図4 A区遺構平面図

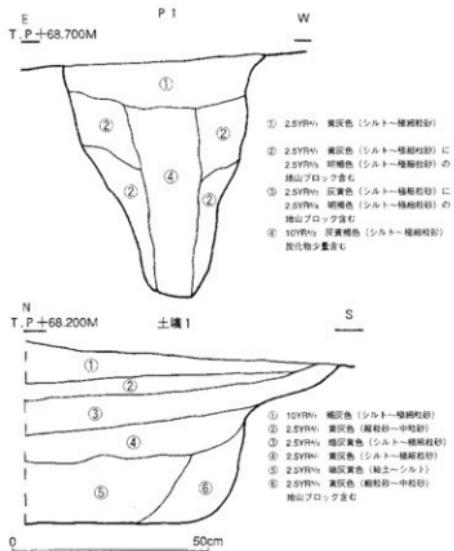


図5 P1・土壌1断面図

のであり、後世の埋め戻し土であると考えられる。④～⑥層は、その埋土に若干の細粒砂など多少粗い砂が含まれている。⑥層は、地山土がブロック状に混入しており、掘りかたが崩れて堆積したものであろう。出土した遺物の大半は上層からの出土であり、出土した中世遺物は、後世の流入であると考えられる。

土壌2

土壌1の西側に位置する。土壌1と同様、調査区外へと続くので、全体形は不明であるが、検出できた範囲で、幅160cm、深さ70cmを計る。遺構平面図は、調査最終時に測量したものであるが、台風などのため掘りかたが崩れ、検出段階の規模よりも大きくなっている。①層は、調査区壁面⑫層と類似しており後世の流入土と考えられる。⑥層には地山土がブロック状に多く混入しており、人為的な埋め戻しも考えられるが、他層において人為的埋め戻しの状況は確認できなかった。

P1

直径約50cmの円形の掘りかたであり、C区やE区で検出した掘立柱建物のピットととは形状が異なる。深さは約70cmを計り、ほぼ中央に粘性の強いシルトの層が確認でき、柱痕部と考えられる。この層からは少量ではあるが炭化物もみられた。付近でのピットとの関連性が伺える遺構は検出できなかったため、後述する他の調査区の遺構群を加味すると、この調査区が遺構群の北辺に位置する可能性も高い。

土壌1

土壌2の東側に位置する。調査区外へと続くため全体の規模は不明である。検出規模で東西幅80cm、深さ50cmをはかる。掘り方の途中、T.P +68.000m付近から傾斜角度が変わり、ほぼ真下に落ちる。

①～③層はブロック状の堆積が伺えるも

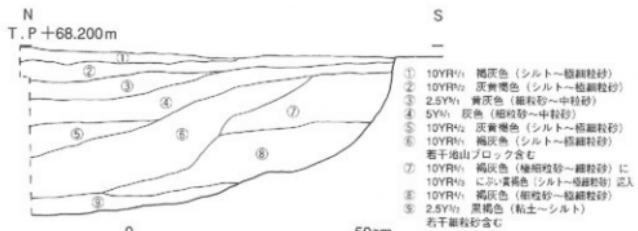


図6 土壤2断面図

土壤3

A区西側、溝3の西側で検出した。須恵器壺の体部から頭部にかけて湾曲して立ち上がる途中、いわゆる肩部付近で割れており、須恵器壺の肩部から上方に向かって平瓦を立てかける形にする。平瓦5枚を円形に囲っている。壺の底部は、打ち欠き割られている。

埋土は、基本的には壺内部に堆積していた層と掘りかた部に人为的に埋められた①層に分けられる。壺内部の層は、灰色の均質な砂質土で、下部の方がやや砂の粒子が粗い感じを受けたが層を分けるほどの違いはなかった。①層は、硬くしまっており、壺の外側を版築したような形で硬く固めてある。壺の底部付近の西側には、扁平な石をかまし、掘りかたを大きくとっているのに対し、東側掘りかたと壺体部の間はほんのわずかでしかなく、西側から壺を入れたことが伺える。この遺構の機能としては、壺底部が打ち欠き割られていることや、平瓦で口部を構成していることなどを加味すると井戸として利用されていたものと考えられる。

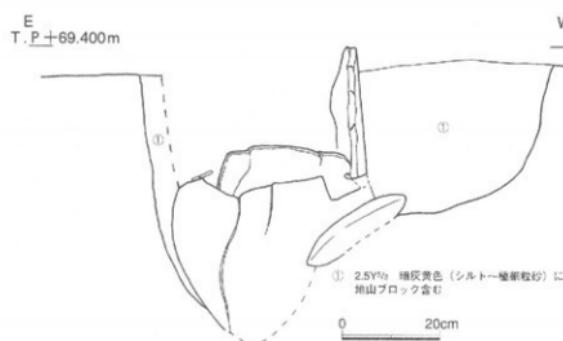


写真5 壺内部掘削後

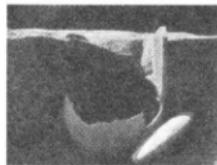


写真6 断ち割り状況

図7 土壤3立面図

溝3

埋土の大半が後世に埋め戻されたものであると考えられる。⑤層は、④・⑥層と同様の土がブロック状に混入し、また地山土も多数見られる。遺物の大半はこの層からの出土である。⑦層は他層とは異なり砂疊で堆積しており、一時期に流水していたことを示すものと思われる。後述するC区の溝4と軸がほぼ同様の傾向を示し、同一遺構であった可能性が高いものの、その埋没過程は、人為的な埋め戻しが推測される当遺構に対し、上層まで流水堆積が確認される溝4とは大きく異なる。

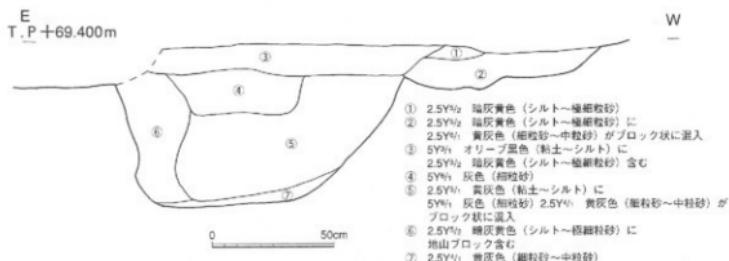


図8 溝3断面図

C区

掘立柱建物1

復元できる建物規模は、 2×2 であるが、P2を含めると西側に延びる可能性がある。柱間の距離を考慮に入れると南北方向に延びる可能性は少ない。掘立柱建物2と新旧関係になり、掘立柱建物3とは近接するので、これらとは時期が異なる。建物軸は、N 3° Wで、ほぼ真北に軸をとっている。

掘立柱建物2

調査区外へ続くので、建物規模は推定の域をでないが、推定復元規模 2×3 間以上になり、主軸 N 7° Wになる。先述したように掘立柱建物1と新旧関係になるとと思われる。桁行の柱穴の方が梁行の柱穴よりも堀方が小さく浅い。後述する掘立柱建物6に付随する庇部分の柱穴程度の規模である。

掘立柱建物3

掘立柱建物4と切りあっている。両建物ともに主軸 N 3° Wで、掘立柱建物1と同一主軸になる。検出規模は 1×4 間であるが、建物の東側と南側は調査区外となるため、これ以上の建物になるものと思われる。特にP16の南側にある溝14を掘削中、



写真7 C区全景



写真8 P16南側柱痕確認状況

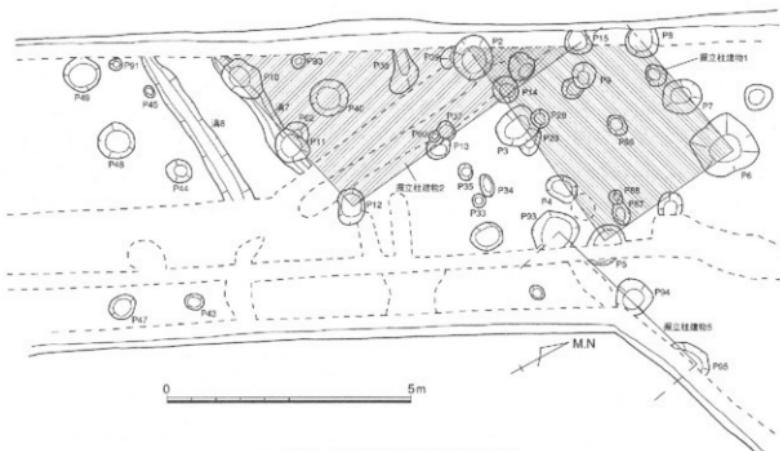


図9 C区掘立柱建物平面図

柱の木材が確認されている。溝が埋まつた後、柱穴が作られたものであると考えられるが、担当者の力不足のため、溝14検出時にこの柱穴の掘りかたを検出できなかった。写真8の状態で検出しておらず、本来並んで一つの建物を形成していたものと考えられる。

掘立柱建物4

各柱穴断面観察から掘立柱建物3に先行するものである。主軸は掘立柱建物3と同軸を計る。柱穴の半分以上が掘立柱建物3の柱穴に切られているので、掘りかた幅などは不明であるが、掘立柱建物3よりも、浅く小さい。掘立柱建物2桁行の柱穴の規模と類似する。

溝4

E

T.P +69.45M

W

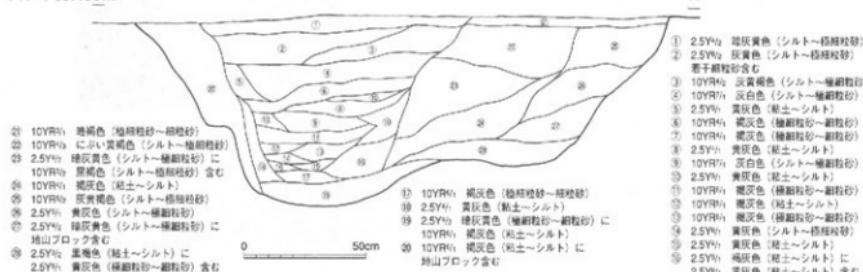


図10 溝4断面図

幅2m20cm、深さ80cmをはかる。堆積の状況や溝の方向などからA区の溝3とつながる可能性が高い。また、遺物整理の結果、溝5や土塙4の出土遺物が接合する結果になっている。溝5や土塙4は切りあつておらず、これらが後世の流入によって遺物が含まれている可能性を加味すれば、溝4と溝5は、調査区外で直角に曲がる同一溝であった可能性が非常に高くなる。ただし、この周辺は、

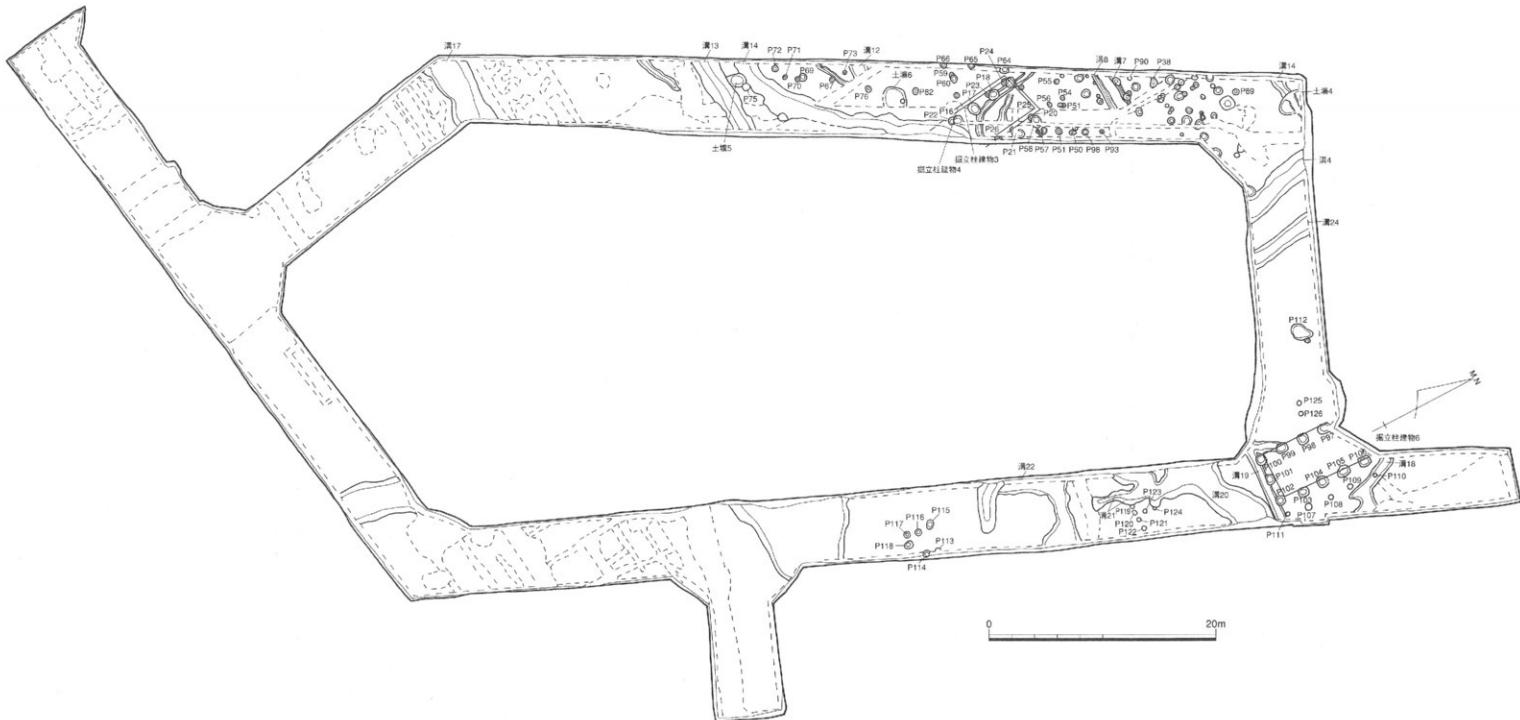


図11 B～E区遺構平面図

地山直上まで配水管工事などに伴う搅乱によって遺構面が著しく削平されている箇所でもあり、また、木の根によって地山が削り取られていた箇所であるので、同一個体の遺物が両遺構から出土している事実の評価については、同一溝である可能性を指摘するに留めたい。

滿13

溝14の南側で検出した。幅2m、深さ70cmを呈す。下半分は、砂質性の強い埋土で構成されているのに対し、上層はブロック状に混在した土で構成されており、後世に人為的な埋め戻しがなされたものと判断できる。ブロック状の堆積をしている箇所から瓦器碗が出土しており、中世段階で埋め戻しが行われたものとを考えられる。

潤14

C区を南西から北東に横切る形になる。全体的な傾向として南西方向のほうが浅く、北東方向のほうが深い。また、底の部分は凹凸が激しく、掘り方も人為的に掘削したものと言うよりは、流水によって部分的に削りとられているような形で蛇行している箇所も見られる。遺構の埋土は、粘質性がつよい黒褐色を基盤としている。溝の底面や掘り方付近に、砂質性の堆積などの流水による堆積状況は確認できなかった。方向から考えると、E区で検出した溝20につながることも考えられるが、後述するように遺構に対する堆積状況が全く異なる様相を示すので、同一溝とは考えにくい。

1995年度に大阪府教育委員会が調査を行った新堂庵寺伽藍の北側では、従来存在していた溝を人為的に埋めて整地を行い、掘立柱建物群を形成していたことが確認されている。当調査区において、新堂庵寺跡存続該当時期に、整地などをおこなった形跡は、調査区壁面や平面観察からは見られなかった。また、溝24埋土についても、人為的な埋め戻しを示すブロック状の堆積なども確認はできなかった。流水していたものとすれば、当調査区の地形から判断し東側方向に流れしていくことが考えられE区で検出されたいずれかの溝に繋がるものと想定される。



図12 溝13・14・土壤5断面図

E区

掘立柱建物 6

復元規模 2×4 間以上、東側に庇が附属する掘立柱建物である。北側は、調査区外になるので全体規模は不明である。庇の並びから考えると桁行4間である可能性もある。ただし、中世段階の耕作化で建物の北東方向は大きく遺構面を削り取られているので、本来は北側に続いている可能性も

否定できない。いずれにしても、今次調査区での成果ではもっとも良好に確認できた建物である。P102からは平瓦2枚が重なって出土しており、P105、P106から柱穴底部に瓦片が敷きつめられていた。また、P98・P99の柱痕部分からも瓦片が出土している。P98・99・105・106出土の瓦片がたがいに接合でき、それぞれが同一個体となる。P98やP99については、それぞれ柱痕部分埋土中の出土で、遺構底面に据えられた形での出土ではないが、P105・106は、破片であるものの柱痕底面に敷かれたものと言える資料であるので、流入過程による偶然の一一致ではなく、複数の瓦を意図的に埋置した結果であると考えられる。建物6を構成する柱穴の中には川原寺期の瓦が出土するP102やP103もあるが、互いに接合しあう資料はいずれも天平期の瓦であること、また出土した瓦に使用痕などがみられないことから、建物の帰属時期が天平期である可能性が高い。

E区には、他にP113～P118で構成される掘立柱建物7やP119～P122やそれに伴うP123・124などで構成されるピット群がある。また、E区の上層から中世以降の耕作化に伴う床上面から瓦を敷き詰めた暗渠状の遺構が確認されている。

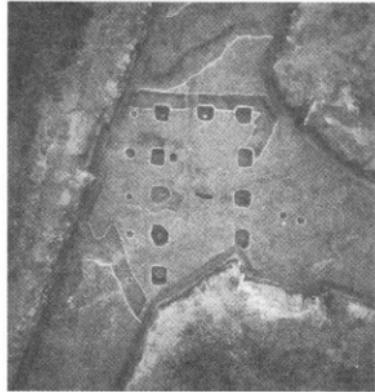


写真9 挖立柱建物 6



写真10 瓦積み暗渠

出土遺物

今回の調査では土師器、須恵器、黒色土器、瓦器、土師質土器、瓦質土器、陶磁器、製塙土器などの容器類、埴仏などの土製品類と石類のほか、大量の瓦埠類が出土している。それらの出土状況は表1に示したとおりである。

遺物の総量はコンテナに103箱で、その内訳は容器類が11箱、石類が3箱、瓦埠類が89箱である。埴仏は1点だけである。

出土遺物の大半を占める瓦埠類は、A区で出土した近世の左棧瓦1点を除いて、すべて新堂廃寺で使用されていたものと同じ「群」で構成されている^(rt1)。これら瓦埠類の9割以上が、天平期に製造された縄目叩きの施された一枚作りの平瓦Ⅲ 2 J 2 ac群～平瓦Ⅲ 2 J 2 ab群である。その次に多いのも、同じく天平期の平瓦で、縄目叩きの施された桶巻き作りの平瓦Ⅱ 1 J 1 b群～平瓦Ⅱ 1 J 1 f群と分類される平瓦類である。飛鳥期の平瓦は、平行叩きの施された平瓦Ⅱ 0 Za [Aa] 群と平瓦Ⅱ 0 Za [Am] 群が比較的まとまって出土しているが、全体からみれば0.3割程度しかない。これらの「群」以外のものもあるが、それぞれ数点づつ出土しているにすぎない。また機能別にみれば、瓦埠類の9割以上が平瓦で、丸瓦は1割にも満たない。軒瓦類は9点あるが、「山田寺式」期の軒平瓦AA 3～平瓦Ⅱ 0 Za <i>群「布袋リ平〇」が1点、「川原寺式」期の軒丸瓦J群が1点、軒平瓦AA 5～平瓦Ⅱ 0 Za [Br] 群「布袋不明」・軒平瓦AA 5～平瓦Ⅱ 0 Za <iii>群「布袋ル平1」が各1点、天平期の軒丸瓦L群が2点と識別できるだけで、それ以外は軒瓦とわかるだけである。

出土状況からみると、瓦埠類の約5割(45箱)がE区の暗渠1(7箱)と、暗渠2(38箱)からの出土で、共伴する上器の所属時期と、瓦埠類にべつとりと付着したスサ混じりの土の状況から、新堂廃寺廃絶後に不要になった瓦埠類を暗渠の構築に再利用したことが推測される。

天平期の縄目叩きの施された一枚作りの平瓦の出土量が多いなかで注目すべきは、同じ縄目叩きの施された一枚作りの平瓦でも、平瓦Ⅲ 2 J 2 aa群～平瓦Ⅲ 2 J 2 ad群がまったく出土していないことである。1997年～2001年にかけておこなった寺域内部の調査では、全体量としては少ないものの、これらの「群」の瓦が西方建物周辺や東方建物周辺など、いわゆる主要伽藍周辺で出土しているのに対して、今回の調査で多く出土している平瓦Ⅲ 2 J 2 ae群～平瓦Ⅲ 2 J 2 ab群は、南門や、築地塀などの寺域の外郭施設のために製造された瓦類であることが判明している(栗田2005)。調査区により近い施設で使用されていたこれらの瓦が、寺域外西側で再利用されたことを示唆しているのであろう。なお、今回の調査ではこれらの平瓦群を製造するのに「布ト」を使用したものが多く確認されているが、今まで調査対象としてきた1969年のオガンジ池瓦窯跡、1984年の寺域外西側の調査、量的には少ないものの1997年～2001年にかけて富田林市教育委員会でおこなった寺域内部調査での検討結果では「布ツ」を使用したものが圧倒的に多いことが判明している^(rt2)。

容器類の9割は7～8世紀の土師器と須恵器である。

以下に調査の地区割に従って、主要な遺構から出土した遺物を図示し、それについてのみ記述するが、遺構ごとの出土状況は表1を参照されたい。

表1 出土遺物総覧（その1）

地区名	遺構の種類	特徴番号	出土遺物		備考
			土器・石器・土器品など	瓦	
八区	P1	-	-	-	-
A区	上築1	-	須恵器（腰部斜片）、土師器（中空～環状片？环片？片持？）	天平期（平瓦Ⅱ(2a) (iv) 群「布袋リ平0」）	-
A区	上築2	-	上築器（時期不明）	川原寺式窯（平瓦Ⅱ(0)群「布袋カ平0」）	土器2と後1で平瓦が ひっつく
A区	土築3	博団13-1、2 博15D-1平1-3 津15M-7平4-6	須恵器（腰部斜片・平底（7度前半））、 砂岩1点	天平期（平瓦Ⅱ(2a)群「布ツ」） 飛鳥期（平瓦Ⅱ(0)群「新「布袋リ平0」」） 川原寺式窯（平瓦Ⅱ(0)群「布袋ルア」）「布袋リ平0」 「布袋ソ平」、平瓦Ⅱ(0)群「布袋カ40」） 天平期（平瓦Ⅲ(2)群「布ツ」）、平瓦Ⅱ(2a)群「布ツ」）	-
A区	溝1	-	-	-	-
A区	溝2	-	須恵器（腰部斜片）、土師器片（時期不明）、 鶴尾（摩子）	山田寺式窯（平瓦Ⅱ(2a) (ii) 群「布袋リ平0」） 天平期（平底式土瓦、行持1-12a (xiii) 群「布袋タ行高0」）、平 瓦Ⅱ(2)群「布ツ」）、平瓦Ⅱ(2a)群「布ツ」）、平瓦Ⅱ(2a)群 「布ツ」）	土器2と溝1で平瓦が ひっつく
A区	溝3	-	須恵器（环A・环B・支・奥・8世紀）、 土師器（羽・羽加）、 瓦器（羽茎（14世紀））、鉢器（近世）	飛鳥期（行持大正瓦、平瓦Ⅱ(0)群「布袋ソ平0」） 天平期（平瓦Ⅱ(0)群「布袋タ平0」）、平瓦Ⅱ(2)群「布ツ」） 天平期（平瓦Ⅱ(0)群「布袋カ平0」）、平瓦Ⅱ(2)群「布ツ」） 天平期（平瓦Ⅱ(0)群「布袋レ平0」）、平瓦Ⅱ(2)群「布ツ」） 近畿初期（左検院）	-
A区	後古窯	-	須恵器	天平期（玉絃1-32 (J) h群「布袋ト玉絃0」）、平瓦Ⅱ(2a) (iv) 群「布袋ソ6」）	-
A区	後古窯跡	-	須恵器（环B（8世紀）・腰部斜片）、土師器（便）	-	-
B区	溝2	-	-	-	-
B区	飛鳥期前	-	須恵器（环B（8世紀）・便）、土師器	天平期（平瓦Ⅱ(2)群「布袋タ平0」）	-
C区	撫立柱建物1 (P2)	博団16-7	須恵器、土師器（环A（8世紀））、製塗土器	天平期（平瓦Ⅱ(2)群（1段）「布ツ」）	-
C区	撫立柱建物1 (P3)	-	-	-	-
C区	撫立柱建物1 (P4)	-	須恵器、土師器（時期不明）	天平期（平瓦Ⅱ(2)群「布ツ」）、平瓦Ⅱ(2)群「布ツ」）	-
C区	撫立柱建物1 (P5)	-	須恵器、土師器（時期不明）	天平期（平瓦Ⅱ(2)群「布袋リ平0」）	-
C区	撫立柱建物1 (P6)	博団16-6, 8	須恵器（环A・环B・环C・环D・第（7～8世紀））、 土師器（环A）	飛鳥期（平瓦Ⅱ(2a)群「布袋文平0」）	-
C区	撫立柱建物1 (P7)	-	土師器（時期不明）	-	-
C区	撫立柱建物1 (P8)	-	土師器（おぞら・皿（7～8世紀）・便）	-	-
C区	撫立柱建物1 (P9)	-	-	-	-
C区	撫立柱建物2 (P10)	-	-	-	-
C区	撫立柱建物2 (P11)	-	-	-	-
C区	撫立柱建物2 (P12)	-	-	-	-
C区	撫立柱建物2 (P13)	-	土師器（時期不明）	飛鳥期（平瓦Ⅱ(2)群「布袋コ平0」）	-
C区	撫立柱建物2 (P14)	-	-	-	-
C区	撫立柱建物2 (P15)	-	-	-	-
C区	撫立柱建物3 (P16)	-	-	飛鳥期（平瓦Ⅱ(2)群「布袋シ平0」） 天平期（平瓦Ⅱ(2)群「布袋シ平0」）	撫立柱建物3の(P16)と (P22)で平瓦がひっつく
C区	撫立柱建物3 (P17)	博団16-10	須恵器、土師器（高脚）、製塗土器	飛鳥期（玉絃1-22a群「布袋ハ玉絃0」） 山田寺式窯（平瓦Ⅱ(0)群「布袋リ平0」）	撫立柱建物3の(P17)と (P18)で平瓦がひっつく
C区	撫立柱建物3 (P18)	-	須恵器（环A（8世紀））、土師器（羽茎）	飛鳥期（平瓦Ⅱ(0)群「布袋リ平0」） 山田寺式窯（平瓦Ⅱ(0)群「布袋リ平0」）	撫立柱建物3の(P17)と (P18)で平瓦がひっつく
C区	撫立柱建物3 (P19)	-	須恵器（环A・环B（8世紀））、土師器（环A・ 环B（8世紀）・羽茎）	飛鳥期（平瓦Ⅱ(2)群「布袋日平0」）	-
C区	撫立柱建物3 (P20)	-	須恵器、土師器（時期不明）	-	-
C区	撫立柱建物3 (P21)	博団16-9	須恵器（环A（8世紀））、土师器（环A（8世紀））	天平期（平瓦（群不明）） 飛鳥期（平瓦Ⅱ(2)群「布袋チ平0」）	-
C区	撫立柱建物4 (P22)	-	須恵器、土師器（羽茎（7～8世紀））	天平期（平瓦Ⅱ(0)群「布袋レ平0」）、平瓦Ⅱ(2)群 「布ツ」）	撫立柱建物3の(P17)と (P22)、撫立柱建物3 (P16) とP21で平瓦がひっつく
C区	撫立柱建物4 (P23)	-	-	-	-
C区	前立柱建物4 (P24)	-	土師器（小皿）	飛鳥期（平瓦Ⅱ(2a)群「布袋コ平0」）	-
C区	前立柱建物4 (P25)	-	-	-	-
C区	撫立柱建物4 (P26)	-	-	-	-
C区	撫立柱建物5 (P27)	-	-	天平期（平瓦Ⅱ(2)群「布袋不明」） 山田寺式窯（平瓦Ⅱ(0)群「布袋リ平0」）	-
C区	撫立柱建物5 (P28)	-	須恵器（便）	天平期（平瓦Ⅱ(2)群「布袋リ平0」）	-
C区	P29	-	-	-	-
C区	P30	-	-	-	-
C区	P31	-	-	天平期（平瓦Ⅱ(2)群「布ツ」）	-
C区	P32	-	上師器（時期不明）	-	-
C区	P33	-	-	-	-
C区	P34	-	-	-	-
C区	P35	-	上師器（時期不明）	-	-
C区	P36	-	土師器（時期不明）	-	-
C区	P37	-	土師器（時期不明）	-	-
C区	P38	-	-	-	-
C区	P39	-	-	-	-
C区	P40	-	上師器（時期不明）	天平期（平瓦Ⅱ(2)群「布ツ」）	-
C区	P41	-	-	時期不明（平瓦）	-
C区	P42	-	-	-	-
C区	P43	-	-	-	-
C区	P44	-	-	-	-
C区	P45	-	-	-	-
C区	P46	-	上師器（時期不明）	天平期（平瓦Ⅱ(2)群「布ツ」）	-
C区	P47	-	-	時期不明（平瓦）	-
C区	P48	-	-	-	-
C区	P49	-	-	-	-
C区	P50	-	-	-	-
C区	P51	-	土師器（小皿（13世紀）・皿）	-	-
C区	P52	-	須恵器、土師器（時期不明）	-	-
C区	P53	-	-	-	-
C区	P54	-	-	-	-
C区	P55	-	-	-	-
C区	P56	-	-	-	-
C区	P57	-	-	-	-
C区	P58	-	-	-	-
C区	P59	-	-	-	-
C区	P60	-	-	-	-
C区	P61	-	-	-	-
C区	P62	-	-	-	-
C区	P63	-	-	-	-
C区	P64	-	-	-	-
C区	P65	-	-	-	-
C区	P66	-	-	-	-
C区	P67	-	-	-	-

(イタリック体で示したものは博団で扱った資料、ゴシック体で示したもののは「ひついた」資料)

表1 出土遺物総覽（その2）

(イタリック体で示したものは博図で扱った資料、ゴシック体で示したものは「ひついた」資料)

表1 出土遺物総覲（その3）

C区	漁5	博岡20 刃丸2, 平9	須恵器（壺（8世紀））、土師器（壺A・壺B）	天平期（鉢丸2.0za群・平瓦2.0za群「布ト」）	漁4と漁5で平瓦がひっつく
C区	漁6	-	須恵器（壺A・壺B・壺C群（8世紀）・壺）、上師器（壺）	飛鳥期（平瓦2.0za群「布袋ワ平0」・平瓦2.0 za群「布袋ル平0」） 川原寺式期（行基1.1za（xx）群「布袋ル行基0」） 天平期（「布袋丸2.0za群「布ツ」・平瓦2.0za群「布ツ」・平瓦2.0za群「布ト」）	上漁4と漁6で平瓦がひっつく
C区	漁7	-	須恵器、土師器（高环（8世紀後半）・壺）、黑色土器（碗A）・儲罐（舟身）	天平期（「九丸」・布袋二行基0） 川原寺式期（行基1.1za（xx）群「布袋ル行基0」） 天平期（「平瓦丸2.0za群「布ツ」・平瓦2.0za群「布ト」）	漁5と漁7で平瓦がひっつく 立待塙物5（P56）とP63に記されている
C区	漁8	-	須恵器、土師器（高环（8世紀後半）・壺）、黑色土器（碗A）・儲罐（舟身）	天平期（「九丸」・布袋二行基0） 川原寺式期（行基1.1za（xx）群「布袋ル行基0」） 天平期（「平瓦丸2.0za群「布ツ」・平瓦2.0za群「布ト」）	-
C区	漁9	-	須恵器（壺A・壺C（7～8世紀）・土師器（壺A（8世紀）・壺）	天平期（「九丸」・布袋小玉球0） 飛鳥期（行基1.1za（xx）群「布袋二行基0」・平瓦2.0za群「布ツ」）	-
C区	漁10	-	須恵器（時期不明）	天平期（「九丸」・布袋小玉球0） 飛鳥期（行基1.1za（xx）群「布袋二行基0」・平瓦2.0za群「布ツ」）	-
C区	漁11	-	-	天平期（「九丸」・布袋小玉球0） 飛鳥期（行基1.1za（xx）群「布袋二行基0」・平瓦2.0za群「布ツ」）	-
C区	漁12	-	-	天平期（「九丸」・布袋小玉球0） 飛鳥期（行基1.1za（xx）群「布袋二行基0」・平瓦2.0za群「布ツ」）	-
C区	漁13	博岡16～24, 25	須恵器（壺）、瓦器（壺（12世紀後半～13世紀前半）・罐）	川原寺式期（平瓦2.0za（Bp）群「布袋ル平0」） 天平期（平瓦2.0za群「布袋不明」・平瓦2.0za群「布ツ」・平瓦2.0za群「布ト」）	-
C区	漁14	博岡16～15～18	須恵器（壺A・高环）、土師器（壺A（8世紀））	山田寺式期（乳瓦2.0 za（i）群「布袋リ平1」） 天平期（平瓦2.0za群「布ツ」）	-
C区	漁15	-	-	-	-
C区	漁16	-	-	-	-
C区	漁17	博岡16～19～23	須恵器（壺A・壺B・外舟着（8世紀）・壺）、土師器（羽釜（8世紀）・壺、1始器（羽釜）、九器（鉢）	飛鳥期（玉達2.2za群「布袋ハ玉球0」・行基1.2za（ii）群「布袋二行基1」・平瓦2.0za群「布袋ハ平0」） 天平期（玉達丸2.2za群「布袋タ玉球0」・平瓦2.0za群「布ツ」・平瓦2.0za群「布ト」・平瓦2.0za群「布ツ」・平瓦2.0za群「布ト」・平瓦2.0za群「布ツ」）	-
C区	包合層	-	須恵器（壺B（8世紀）・壺G蓋・壺・台壺）、土師器（壺B・壺C（8世紀）・小器（中壺））	山田寺式期（乳瓦2.0za（i）群「布袋リ平0」） 天平期（平丸1.1za群・平瓦2.0za群「布袋不明」）	-
C区	埋瓦	-	須恵器（壺A・壺B・外舟着、56系・鉢・壺）、土師器（壺A・壺C（8世紀）・鉢・壺・壺）	川原寺式期（平瓦2.0za群「布袋ソ平0」） 天平期（平瓦2.0za群「布ツ」・平瓦2.0za群「布ト」）	-
C区	曲輪掘削時	-	土師器（壺（おそらく7～8世紀）・壺）	飛鳥期（平瓦2.0za群「AK」群「布袋ヨ平0」）	-
D区	曲輪掘削時	-	大平期（平瓦2.0za群「J-Eay群「布ツ」）	天平期（玉様3.2za（J1b）群「布袋タ玉球0」・平瓦2.0za（iv）群「布袋レ平0」・平瓦2.0za群「布ツ」・平瓦2.0za群「布ト」）	-
D区	須恵器	-	須恵器（壺A・外B（8世紀）・壺）、土師器（壺A・壺・羽釜（8世紀））	天平期（「布袋タ玉球0」群「布袋レ平0」・平瓦2.0za群「布ツ」）	-
D区	花崗岩切石	-	花崗岩切石	飛鳥期（「布袋タ玉球0」群「布袋二行基0」） 天平期（「布袋タ玉球0」群「布袋二行基0」・行基1.1za（ii）群「布袋レ平0」）	須恵器の裏に壺Bと壺G蓋の着目したものがある。
D区	包合層	-	須恵器（壺G蓋・壺・台壺）、土師器（壺）	山田寺式期（乳瓦2.0za（Ha）群「布袋リ平0」） 川原寺式期（平瓦2.0za群「布袋カ平0」） 天平期（平瓦2.0za（iv）群「布袋レ平0」・平瓦2.0za群「布不明」）	土器4+D区包合層で平瓦がひっつく
E区	掘立柱建物6 (P97)	-	-	-	-
E区	掘立柱建物6 (P98)	博岡21-平10	須恵器（壺A（8世紀））、上師器	天平期（玉様丸2.0za「おそらく布レ」・平瓦2.0za群「布ツ」）	掘立柱建物6 (P98)と(P99)で平瓦がひっつく
E区	掘立柱建物6 (P99)	博岡21-平11	上師器	天平期（「おそらく平様丸2.0za群「布ツ」）	掘立柱建物6 (P98)と(P99)で平瓦がひっつく
E区	掘立柱建物6 (P100)	-	-	天平期（「玉様丸2.0za群「布ツ」）	-
E区	掘立柱建物6 (P101)	博岡21-平12	-	天平期（「玉様丸2.0za群「布ツ」）	-
E区	掘立柱建物6 (P102)	博岡22-平13,	-	川原寺式期（行基1.1za（xx）群「布袋ル行基0」）	-
E区	掘立柱建物6 (P103)	博岡19-56	須恵器、土師器（壺A・壺B（8世紀）・壺、土師土器（壺A・壺・羽釜（8世紀））	天平期（「玉様2.0za群「布ト」・平瓦2.0za群「布ツ」）	-
E区	掘立柱建物6 (P104)	-	-	川原寺式期（平瓦2.0za（Bp）群「布袋カ平0」）	-
E区	掘立柱建物6 (P105)	博岡22-平15	-	天平期（「平瓦2.0za群「布ツ」・平瓦2.0za群「布ツ」）	天平期（「平瓦2.0za群「布ツ」・平瓦2.0za群「布ツ」）
E区	掘立柱建物6 (P106)	-	-	天平期（平瓦2.0za群「布ツ」）	天平期（平瓦2.0za群「布ツ」）
E区	掘立柱建物6 (P107)	-	-	-	天平期（平瓦2.0za群「布ツ」）
E区	掘立柱建物6 (P108)	-	-	-	天平期（平瓦2.0za群「布ツ」）
E区	掘立柱建物6 (P109)	-	-	-	天平期（平瓦2.0za群「布ツ」）
E区	掘立柱建物6 (P110)	-	-	-	天平期（平瓦2.0za群「布ツ」）
E区	掘立柱建物6 (P111)	-	-	-	天平期（平瓦2.0za群「布ツ」）
E区	掘立柱建物6 (P113)	-	土師器（壺）	-	-
E区	掘立柱建物7 (P114)	-	-	-	-
E区	掘立柱建物7 (P115)	-	-	-	-
E区	掘立柱建物7 (P116)	-	-	-	-
E区	掘立柱建物7 (P117)	-	-	-	-
E区	掘立柱建物7 (P118)	-	-	-	-
E区	掘立柱建物7 (P119)	-	須恵器、土師器	-	-
E区	執列1 (P120)	-	上師器	-	-
E区	執列1 (P121)	-	-	-	-
E区	執列1 (P122)	-	須恵器（壺）、土師器（壺）	-	-
E区	P112	-	-	-	-
E区	P113	-	-	-	-
E区	P114	-	-	-	-
E区	P115	-	-	-	-
E区	P116	-	-	-	-
E区	P117	-	-	-	-
E区	P118	-	-	-	-
E区	P119	-	-	-	-
E区	P120	-	-	-	-
E区	P121	-	-	-	-
E区	P122	-	-	-	-
E区	P123	-	-	-	-
E区	P124	-	-	-	-

(イタリック体で示したものは博岡で報った資料、ゴシック体で示したものは「ひついた」資料)

表1 出土遺物総覧（その4）

E区	P125	-	-	-	-
E区	P126	-	-	-	-
E区	第18	-	-	-	-
E区	第19	-	-	-	-
E区	第20	-	-	-	-
E区	第21	-	-	-	-
E区	第22	-	須惠器（环球A・环球B（7世紀代））、土師器、 埴輪（馬文）、埴輪（骨格部）、 方形壙12群	飛鳥期（行基式丸瓦・平瓦Ⅱ02a〔Asa〕群「布袋又平0」・ 平瓦Ⅱ02a〔An〕群「布袋ヨイ平」・平瓦Ⅱ02a〔Cg〕群 天平期（手ぬ式丸瓦・平瓦Ⅱ02a群「布袋又平0」・平瓦Ⅱ02c 群「布ト」・平瓦Ⅲ022ac群「布不明」など）	馬尾は第22、埴栗の ものと同一個体か？
E区	第23	拂岡19-等仏	須惠器（麥）、土師器、黑色上器B（11世纪）、 埴輪、馬頭（脊椎部）	飛鳥期（平瓦Ⅱ02a〔Asa〕群「布袋又平0」・平瓦Ⅱ02a〔Ab〕 群「布袋ハ平0」・平瓦Ⅱ02a〔Am〕群「布袋ヨイイ平」・ 平瓦Ⅱ02a〔Ar〕群「布袋ヨイ平0」など）	馬尾は第22、埴栗の ものと同一個体か？
E区	第24	拂岡19-57 拂岡23-平16	須惠器、土師器、陶器、壺（方形壙12群）、方形 壙12群	川原寺式期（平瓦Ⅱ02a〔Bp〕群「布袋カ平0」・平瓦Ⅲ00q群 「布袋ル平0」・平瓦Ⅱ02a〔Cm〕群「布袋カ平0」） 天平期（玉縁・1322ca群「布袋ヨイ平」・平瓦Ⅱ02a群「布袋 ト平0」・平瓦Ⅲ021aa群「布ト」・平瓦Ⅲ022ab群「布不明」・ 平瓦Ⅲ022ab群「布ワ」・平瓦Ⅲ022aw群「布ワ」・平瓦Ⅲ 022ax群「布ワ」・平瓦Ⅲ022bb群「布ワ」など）	-
E区	第25	拂岡19-57 拂岡23-平16	須惠器、土師器（漆器）	天平期（平瓦Ⅲ022cm「布ワ」）	-
E区	彌塚1	-	須惠器、土師器、陶器、壺（方形壙12群）、方形 壙12群	飛鳥期（平瓦Ⅱ02a〔Asa〕群「布袋又平0」・平瓦Ⅱ02a〔Asa〕 群「布袋ワ平0」・平瓦Ⅱ02a〔Ag〕群「布袋ニイ平0」・平瓦Ⅱ 02a〔Am〕群「布袋ヨイイ平0」・平瓦Ⅱ02a〔Bs〕群「布袋 ヨイ平0」・平瓦Ⅱ02a〔Ch〕群「布袋ヨイ平0」） 山田寺式期（平瓦Ⅱ02a〔I〕群「布袋リ平0」） 天平期（平瓦Ⅲ022m群「布不明」・平瓦Ⅲ022ab群「布ワ」・ 平瓦Ⅲ022m群「布不明」・平瓦Ⅲ022aa群「布ワ」・平瓦Ⅲ 022ay群「布」・「ワ」・平瓦Ⅲ022aa群「布不明」・平瓦Ⅲ 022ax群「布ト」・平瓦Ⅲ022ba群「布ウ」）	埴栗東と埴栗西で平瓦 がひつつく
E区	彌塚2	拂岡23-軒平1、 軒平2、半17、 半18	須惠器（环球A・麦）、土师器、黑色上器（环球A）、 瓦葺上器（麦） 方形壙12群	飛鳥期（玉縁・122aa群「布袋ハ正神0」・行基112a〔Ae〕群 「布袋二行神0」・行基112a〔I〕群「布袋チ行神0」・行基 112a〔II〕群「布袋ニ二行基0」・行基112a〔III〕群 「布袋ヘ行神0」・平瓦Ⅱ02a〔Aa〕群「布袋メ平1」「布 袋ヌメ平1」「布袋ヌ平1」「布袋ヌイ平1」「布 袋ヌイ平0」・平瓦Ⅱ02a〔An〕群「布袋ヌ平0」・平瓦Ⅱ02a 〔Am〕群「布袋ヨ平1」「平瓦ヨイイ平1」・平瓦Ⅲ020aa群 「布袋小平0」・平瓦Ⅲ02a群「布袋ハ平0」） 山田寺式期（軒平A3-等瓦J02a〔I〕群「布袋リ平0」・ 平瓦Ⅱ02a〔I〕群「布袋リ平0」・平瓦Ⅲ02a〔I〕群「布袋 リイイ平1」） 川原寺式期（軒平瓦AA5-平瓦Ⅱ02a〔Bp〕群「布袋不明」・ 軒平瓦AA5-平瓦Ⅱ02a〔Bp〕群「布袋ル平1」・平瓦Ⅱ02a 〔Bp〕群「布袋ル平0」・平瓦Ⅱ02a〔Bp〕群「布袋ル平0」・ 平瓦Ⅲ0cm群「布袋ソ平1」・平瓦Ⅲ02a群「布袋ソ平0」・平 瓦Ⅲ00a群「布袋ソ平0」・平瓦Ⅲ02a群「布袋ソ平0」・ 天平期（玉縁・13212a〔Ib〕群「布袋ハ正神0」・玉縁・1331 2a〔Ib〕群「布袋フ正神0」・玉縁・13322a〔Ib〕群「布袋 ハ正神0」・玉縁・112a群「布ワ」・行基112a〔xxi〕群「布 袋カ正基0」・行基112a〔xxii〕群「布袋ウ行基0」・平瓦Ⅱ 02a〔iv〕群「布袋トト平0」・「布袋ト平0」・「布袋ト平0」・ 「布袋レ平0」・平瓦Ⅱ02a〔v〕群「布袋ク平0」・「布 袋ク平0」・平瓦Ⅱ11je群「布袋レ平0」・平瓦Ⅱ 11je群「布袋レ平0」・平瓦Ⅱ11je群「布袋レ平0」・平瓦Ⅱ 11je群「布袋レ平0」・「布袋レ平0」・平瓦Ⅲ2ac~J2ea群 「布ト」「布ワ」・平瓦Ⅲ022aa「布ト」）	埴栗東と埴栗西で平瓦 がひつつく
E区	笠谷塚	-	須惠器（环球B）、土师器 須惠器（环球G（7世纪末）・环球B）、土师器 粘土塊	飛鳥期（行基丸瓦・行基112a〔ii〕群「布袋二行神0」・平瓦 Ⅱ02a〔Asa〕群「布袋ヌ平0」・平瓦Ⅱ02a〔Asa〕群「布袋 ハ平0」・平瓦Ⅱ02a〔Ae〕群「布袋ナ平0」・平瓦Ⅱ02a〔Am〕 群「布袋ヨ平0」・平瓦Ⅱ02a〔Cg〕群「布袋チ平0」） 山田寺式期（平瓦Ⅱ02a〔ii〕群「布袋リ平0」） 川原寺式期（平瓦Ⅱ02a〔Bp〕群「布袋ル平0」・平瓦Ⅲ0 2a〔ii〕群「布袋ル平0」） 天平期（玉縁丸瓦・平瓦Ⅱ02a〔iv〕群「布袋レ平0」・平瓦 Ⅲ11je群「布袋レ平0」・平瓦Ⅲ212aa群「布ワ」・平瓦Ⅲ 212ab群「布ト」・平瓦Ⅲ022ab群「布ワ」・平瓦Ⅲ022ab群 「布ト」・平瓦Ⅲ022aa群「布ト」・平瓦Ⅲ022ab群「布ワ」・平 瓦Ⅲ22az「布不明」） 天平期（玉縁丸瓦・平瓦Ⅱ11je群「布袋レ平0」・平瓦Ⅱ11je 群「布袋レ平0」・平瓦Ⅱ022ab群「布不明」・平瓦Ⅲ022ab群 「布ワ」・平瓦Ⅲ022aa「布ト」）	-
E区	擾乱	-	須惠器、瓦器（或（13世纪））	-	-
E区	表張	-	須惠器（环球A・环球B）、土师器	天平期（平瓦Ⅱ02fe~J2ea群「布ト」）	-
地区	側溝	拂岡23-平19	須惠器（漆作部片）、土师器、 土師質土器（中世） 方形壙12群	飛鳥期（平瓦Ⅱ02a〔Asa〕群「布袋ヌ平1」・平瓦Ⅱ02a〔Asa〕 群「布袋ヨイ平0」・平瓦Ⅱ02a〔Aa〕群「布袋ヨイイ平1」・ 平瓦Ⅱ02a〔Ar〕群「布袋リ平0」・平瓦Ⅲ02a〔Am〕群 「布袋ヨイ平0」） 天平期（平瓦Ⅱ02a〔Bp〕群「布袋レ平0」）	土師質土器はE区昭和東 のものとひつついでいる
地区	表揚	-	須惠器（环球A・环球B・环球G・麦）、土师器（麦、 羽器）、瓦器（或）、サスカイト剥片	天平期（平瓦Ⅱ022aj群「布不明」）	-

(イタリック体で示したものは鉢过で残った資料、ゴシック体で示したものは「ひつついた」資料)

A区（図13～15）

土壤3出土資料だけを記述する。

須恵器の甕（1）、平瓶（2）、平瓦（平1）～（平6）と砂岩を使用して遺構が形成されている。須恵器の甕（1）は口頸部と底部がない。甕は最大腹部径41.6cm、残存器高35.5cmを測る。外面は体部全体に平行叩きと体部下半部にはカキ目が、内面は同心円文が観察できる。口頸部は肩部との接合部で打ち落とされたと推測できるが、摩滅のために打撃痕は観察できない。それに対して、底部は外面から打撃を与えて、直径約20cmの円孔を開けている。平瓶（2）は口頸部と体部の一部が欠損しているが、甕と平瓦の間に入れる際に打ち欠いて使用したのか、壊れたものを使用したのかは分からない。平瓶は頸基部径5.6cm、肩部径17.5cm、底部径9.6cm、残存器高9.6cmを測る。底部はまだ丸みをもつが、肩部は張り出し、平坦面をもち始めている。

平瓦は全部で10点出土している。そのうち、確実に遺構を構成するのは（平1）～（平5）の5点である。これらはすべて白鳳期（川原寺式期）の平瓦II0Za<iii>群に分類できる平瓦である。布袋は（平1）が「布袋ソ平1」、（平2）が「布袋カ平0」、（平3）が「布袋ル平0」、（平4）と（平5）が「布袋ソ平0」である。検出場所で出土した（平6）も平瓦II0Za<iii>群で「布袋カ平0」が使用されている^{[4][5]}。なお、（平1）には凹面狭端部中央に桶に取り付けられた器具の反映痕である円形の突出痕が観察できるが、今回の例で、円形突出痕と窪み痕が同じ「布袋ソ平1」越しに認められることが確認できた。一つの桶にみる差し渡しの器具の反映痕跡の時間差による例としてあげたものである（栗田2005）。

これらの遺構を形成している平瓦類がすべて川原寺式期に所属することは、従前の調査から確認できていたことではあるが（栗田ほか2003）、今回の調査で平瓦と共にした須恵器の所属時期が、甕での時期比定が困難ではあるものの、平瓶が飛鳥III～IVに比定できることから、平瓦を見てきた時期と整合することが明らかになった。新堂廃寺で平瓦の所属時期が共伴土器との関係でも裏付けられた唯一例である。

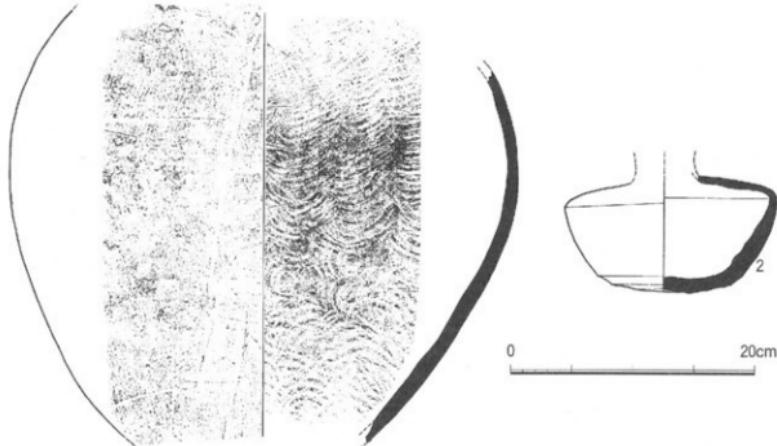
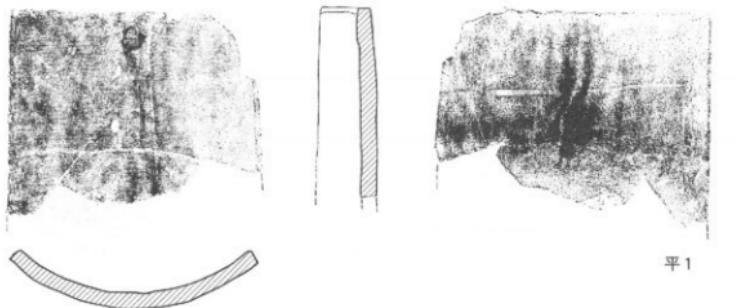
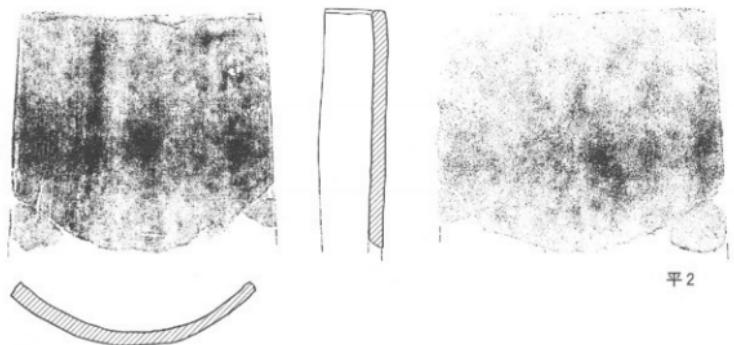


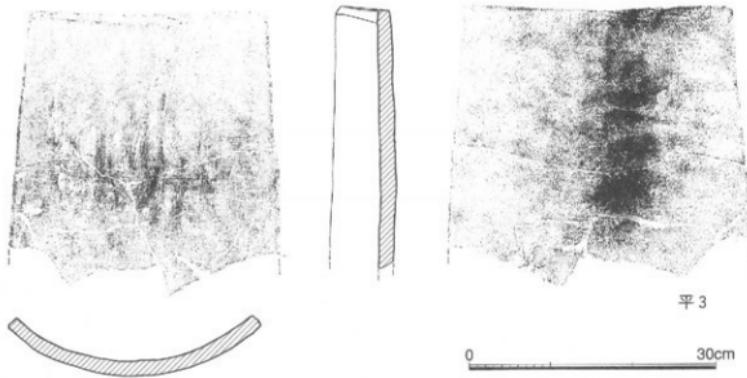
図13 A地区 土壌3出土土器



平1



平2



平3

図14 A地区 土壌3出土瓦

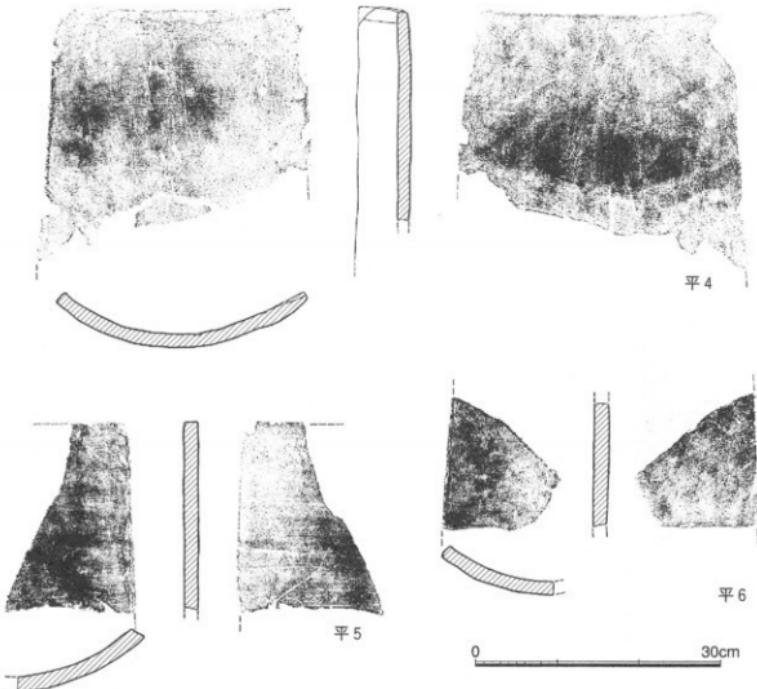


図15 A地区 土壌3出土瓦

C区（挿図16～18, 20）

掘立柱建物1のP6からは、須恵器の坏A(6)、土師器の皿A(8)、P2からは製塩土器(7)が、掘立柱建物3のP17からは土師器の高坏(10)、P21からは土師器の坏A(9)が、掘立柱建物5のP96からは壺(11)が、P58からは須恵器の壺A(12)が、P65からは土師器の壺(65)が、P81からは須恵器の坏蓋H(3)、坏H(4)と、土師器の坏A(5)が出土している。

土壤4は土器類の出土量が多いが、そのほとんどが7～8世紀の須恵器と土師器である。須恵器には坏蓋B(26)～(28)、坏A(31)(32)、坏B(29)(30)(36)(37)、皿A(33)(34)、皿B(35)、壺A(38)、平瓶(41)(43)、壺蓋(39)、壺(40)(42)、壺H(44)、壺L(45)、土師器には皿A(46)～(48)、壺(49)～(51)、羽釜(52)～(54)、製塩土器(55)がある。瓦には軒丸瓦L群の瓦当部（軒丸1）と平瓦皿2 J2 bb群「布ツ」（平7）と平瓦皿2 J2 au群「布ウ」（平8）がある。（平7）には今まで知られていなかった縄目叩き[J2 bb]が施されている。なお、（平8）は土壤4と溝4から出土した破片がひついたものである。

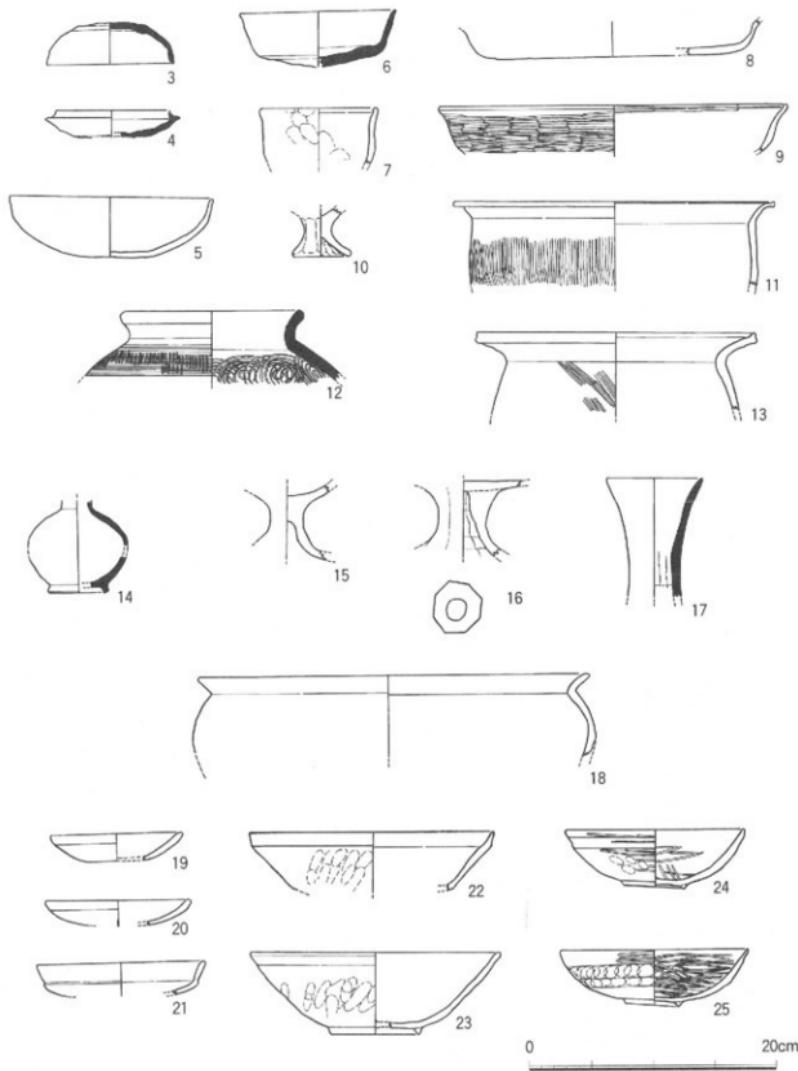


図16 C地区 挖立柱建物1・3・5、ピット58・65・81、溝4・13・14・17出土土器

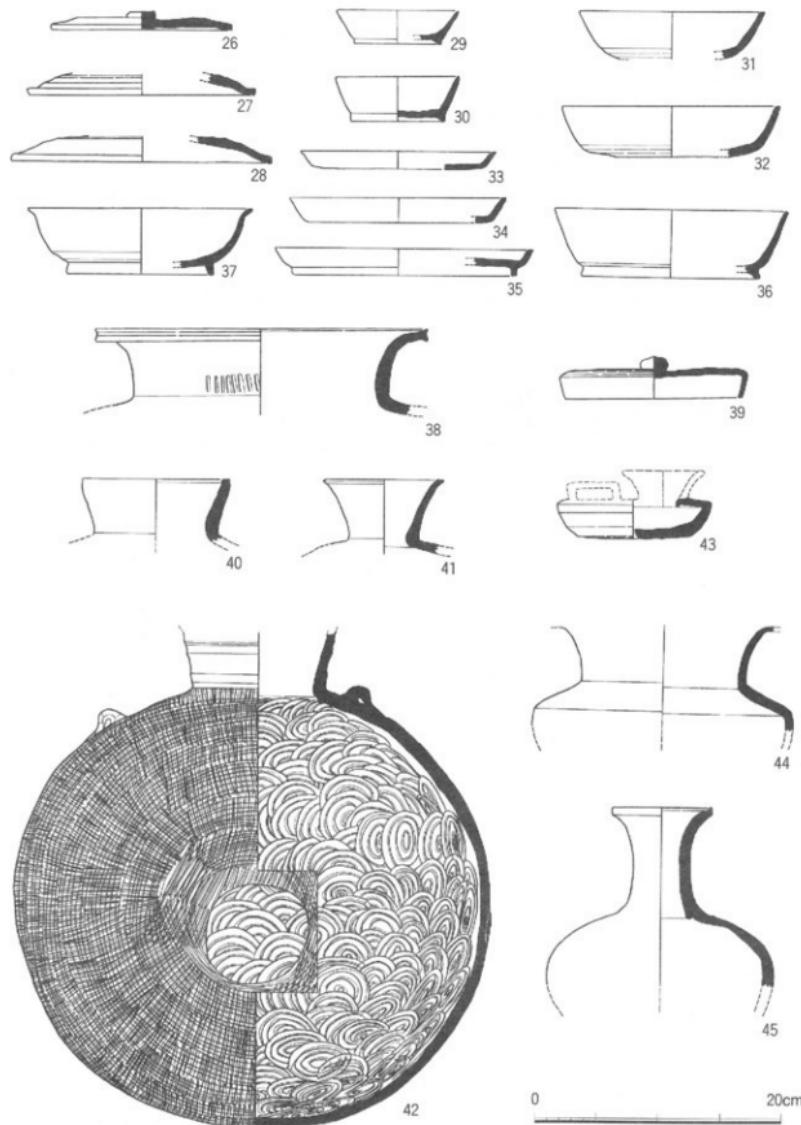


図17 C地区 土壌4出土土器

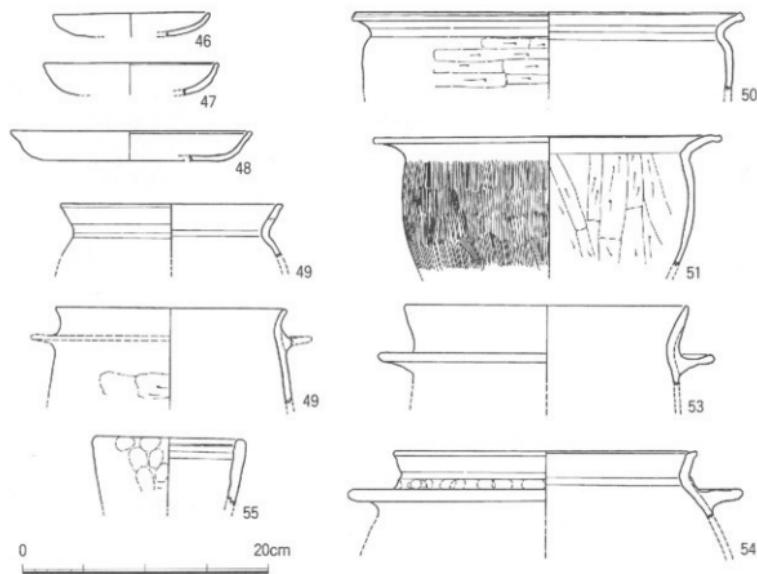


図18 C地区 土壌4出土土器

溝4からは須恵器の小型壺（14）、平瓦Ⅲ2 J2 au群「布ウ」（平8）と平瓦Ⅲ2 J2 au群「布ト」（平9）が出土している。前者の（平8）はすでに述べたとおり、土壌4で出土した破片とひつついでいるが、後者の（平9）は、溝5で出土した破片とひつついでいる。溝5からは軒丸瓦し群（軒丸2）と平瓦Ⅲ2 J2 au群「布ト」（平9）がある。溝14からは須恵器の長頸壺（17）、土師器の高坏（15）（16）、壺（18）がある。溝13からは瓦器の椀（24）（25）、溝17からは土師器の皿（19）～（21）と、瓦器の鉢（22）（23）が出土している。なお、瓦器の鉢はともに炭素の吸着が悪い。

D区（挿図19）

機械掘削時に須恵器の壺B（55）が出土している。

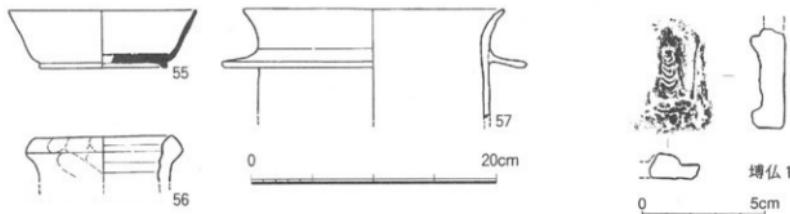


図19 D地区 側溝、E地区 挖立柱建物6、溝24出土土器、埴仏

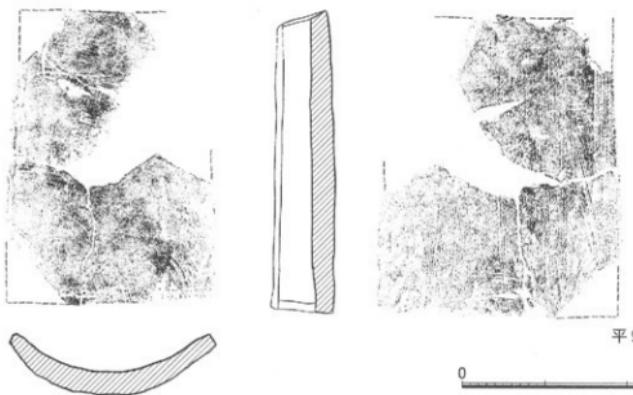
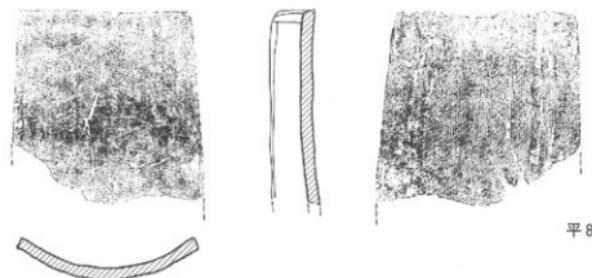
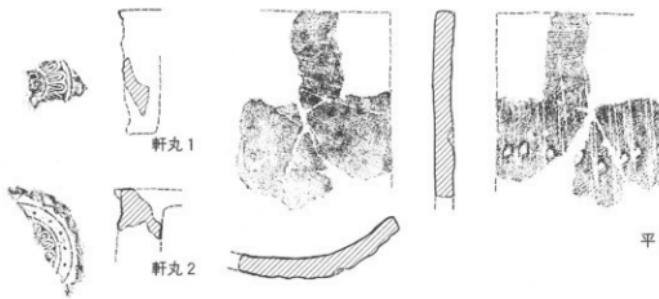


图20 C地区 挖立柱建物1、土壤4 满4出土瓦

E 区（挿図21～23）

掘立柱建物6のP98とP99からは平瓦Ⅲ 2 J 2 an群「布ツ」（平10）が、狹端側（P98）と広端側（P99）にはほぼ2分されて出土している。同じくP99からは平瓦Ⅲ 2 J 2 ah群「布ウ」（平11）が、P101からは平瓦Ⅲ 2 J 2 aq群「布ツ」（平12）が、P102からは平瓦Ⅲ 2 J 2 aq群「布ツ」（平13）（平14）が、P105からは平瓦Ⅲ 2 J 2 am群「布ツ」（平15）が出土している。

なお、製塙土器（56）は掘立柱建物6のP103から出土している。

溝24からは土師器の羽釜（57）と、平瓦Ⅲ 2 Jam群「布ツ」（平16）が出土している。

溝23からは搏仮が出土している。1997年度調査の東方建物周辺や2000年度調査の西方建物周辺で出土しているものと同じ範型による製品である（栗田2003ほか）。

暗渠2からは軒平瓦AA3-平瓦Ⅱ 0 Za [i] 群「布袋リ平0」（軒平2）、軒平瓦AA5-平瓦Ⅱ 0 Za [iii] 群「布袋ル平1」（軒平1）、平瓦Ⅱ 0 Za [Ab] 群「布袋ヌ平0」（平17）、平瓦Ⅱ 0 Za [Aa] 群「布袋ヨナイ平1」（平18）が出土している。

なお、出土地区不明の（平19）と暗渠2出土の（平8）はともに平瓦Ⅱ 0 Za [Aa] 群「布袋ヨナイ平1」に分類できるが、今まで、「布袋ヨナイ平1」は、平瓦Ⅱ 0 Za [Am] 群で使用されていることが確認されていただけであった（栗田2003）。しかし、今回の調査で平瓦Ⅱ 0 Za [Aa] 群にも使用されていたことがわかった。このことから平瓦Ⅱ 0 Za [Aa] 群と平瓦Ⅱ 0 Za [Am] 群が同じ「造瓦単位」に属することが確実になった（栗田2005）。

（註1）今回の調査で天平期に所属する一枚作りの縄目叩きの平瓦に、新たな縄目叩きが確認された。この叩き目を「J2bb」としておく。

（註2）平瓦Ⅲ 2 J 2 ac群～平瓦Ⅲ 2 J 2 ab群の平瓦を南門と墓地場のために製造されたとする見解は、大阪府教育委員会がおこなった調査成果によるところが多いが（梶原2001）、そこで出土した平瓦に使用されていた布が「布ツ」であったのか、「布ト」であったのかは、「布」に対する観察方法が私たちと異なるため検討できていない。

（註3）残り4点はすべて小破片であるが、それらは飛鳥期の平瓦Ⅱ 0 Za [Bs] 群「布袋ヌ平0」、川原寺式期の平瓦Ⅱ 0 Za [Br] 群「布袋カ平0」、天平期の平瓦Ⅲ 2 J 2 af群「布ツ」と平瓦Ⅲ 2 J 2 aq群「布ツ」である。これらの破片が遺構の一部をなしていないかったのは確実であるが、遺構の内部（甕の内側）から出土したのか、遺構の壇方（土壤内側でかつ甕外側）から出土したのかを、発掘時に確認できていない。もし、これら的小破片のうち天平期の平瓦が、後者の壇方からの出土であれば、遺構の構築時期が天平期に入ってしまうことに問題を残すが、内部からの出土であれば川原寺式期に構築された遺構が、少なくとも天平期にも開口したままの状況で存在した可能性を示唆することになる。

参考文献

- 栗田 薫ほか（2003）『新堂廃寺跡・オガンジ池瓦窯跡・お龜石古墳』（富田林市埋蔵文化財調査報告35）富田林（大阪）。
- 栗田 薫（2005）「新堂廃寺・オガンジ池瓦窯出土瓦の研究」山中一郎（編）『大阪府富田林市所在 新堂廃寺・オガンジ池瓦窯出土瓦の研究 京都大学総合博物館平成17年度春季企画展示のための研究成果』所収、17～174頁、京都。
- 梶原義実（2001）「第6節 奈良時代における新堂廃寺の造瓦組織～丸瓦・平瓦の分析より～」、井西貴子（編）『新堂廃寺』（大阪府埋蔵文化財調査報告2001-1）所収、187～196頁、大阪。
- 森郁夫ほか（1992）『古代の土器1 都城の土器集成I』京都。
- 森郁夫ほか（1993）『古代の土器2 都城の土器集成II』京都。

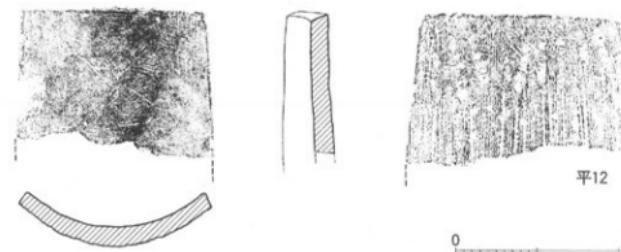
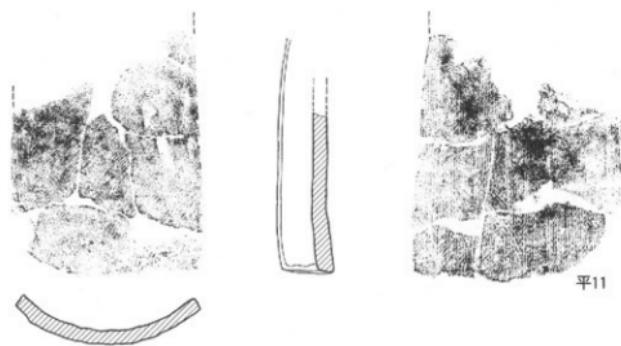
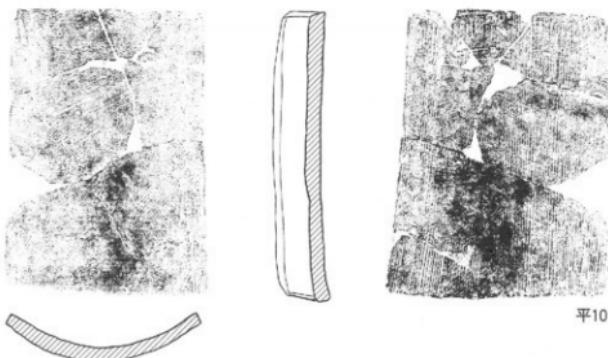


図21 E地区 据立柱建物6出土瓦

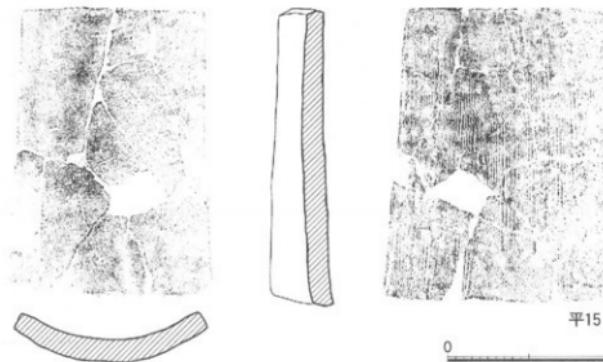
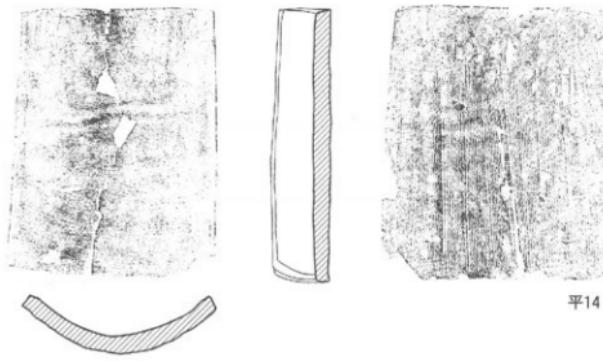
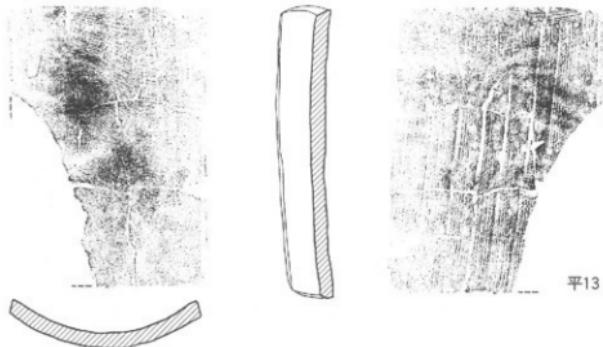


図22 E地区 掘立柱建物6出土瓦

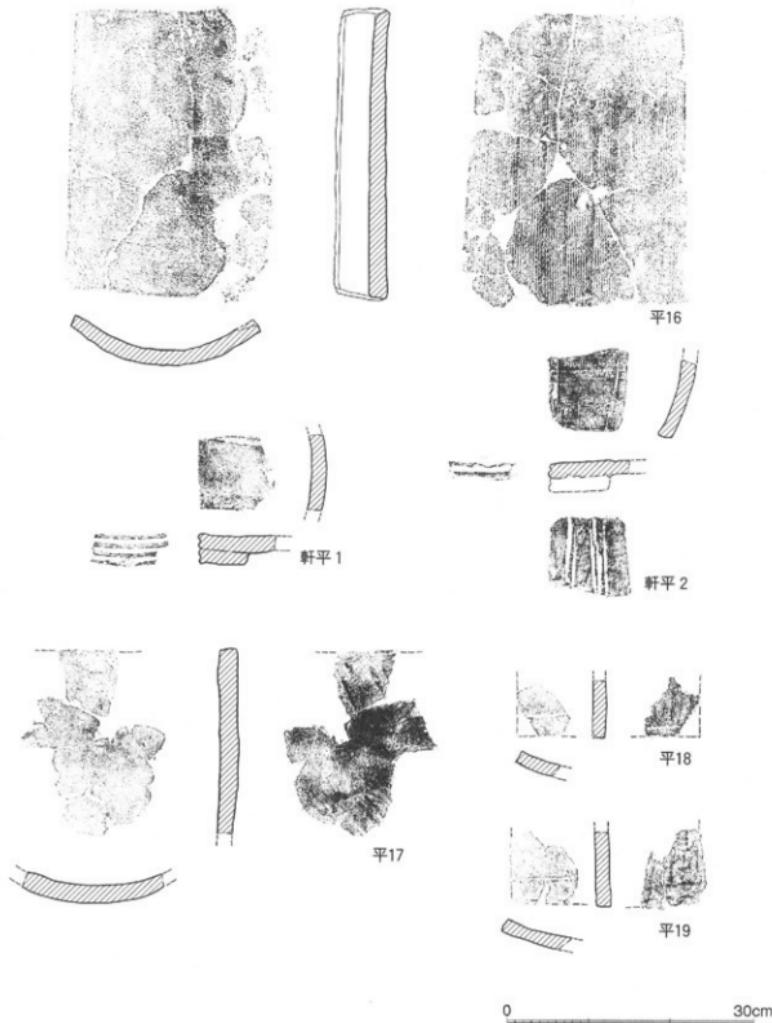


図23 E地区 溝24、暗渠2出土瓦、地区不明表採瓦

第VI章　まとめ

今次調査は、宅地造成に伴う私設道路建設箇所の調査であったため、平面的に遺構群の性格を把握するには至らなかった。

しかし、平瓦を柱穴底部に据えた掘立柱建物6やそれと同規模であると推定できる掘立柱建物3などからみて、寺域北側において検出された集落とほぼ同様の性格を有している事がわかったことは、今後の新堂廃寺跡とその周辺域を考える意味で大きな資料提示になったと言える。

これまでの調査の成果から、寺域北側に展開する集落がいわゆる壇越氏族関連の集落と考えられていた。今次調査区の状況では、C区で検出された掘立柱建物群とE区で検出された東側に庇を有する掘立柱建物6とがどのような関係があったのか、現段階で言及することは出来ないものの、それらの建物の規模などからみて寺域北側で検出された集落とほぼ同規模の集落域が寺域の西側にも展開していたことは、壇越氏族の居住域の範囲についてさらに再考する余地ができたと言える。特に掘立柱建物6は、同一瓦を複数の柱穴に敷いている事、瓦自体に葺かれていた使用痕が見られないことなどから、これらの瓦は製作された時期とそれほどの差をもたない間に、柱穴の下に敷かれた事を推測させ、この様な状況を踏まえると、新堂廃寺と極めて密接な関係のある建物であったことが考えられるのである。ただし、今次調査区でみられた寺域西側地域と北側地域の関連性、もししくは同一集落の可能性を考察するには、C区とE区からのみの判断では、その材料に乏しく、今後の寺域周辺地域の調査の成果を待つ他はない。いずれにしても、新堂廃寺と密接に関連すると考えられる集落が寺域北側と西側に展開していたことがわかったことは、寺院とその建立氏族、壇越氏族の集落域を考える意味で大きな成果があったと言えるであろう。

本来は、寺域北側と今次調査区で検出された掘立柱建物等について比較検討するべきではあるが、紙面の関係と筆者の力量不足から詳細な検討ができなかつた。今後の周辺地域の調査の進展と共に今後の課題としたい。

報告書抄録

ふりがな	しんどうはいじ							
書名	新堂廃寺跡							
副書名								
卷次								
シリーズ名	富田林市埋蔵文化財調査会報告書							
シリーズ番号	26							
編著書名	藤田 徹也 栗田 煉							
編集機関	富田林市遺跡調査会							
所在地	〒584-8511 大阪府富田林市常盤町1番1号 ☎ 0721-25-1000							
発行年月日	西暦2005年6月30日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	北緯 遺跡番号	東経 。	調査期間	調査面積 (m ²)	調査原因	
新堂廃寺跡	富田林市 緑ヶ丘町	27214	159	34° 50' 62"	135° 60' 20"	2004.6.28 ~ 2005.6.30	約2200 m ²	宅地造成 に伴う
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
新堂廃寺跡	寺院跡	飛鳥時代～ 中世	ピット 溝 土壤 掘立柱建物		土師器 須恵器 瓦 瓦器		東側に庇を持つ大型掘立柱建物の検出など	

新堂廃寺跡

発行年月日 2005年6月30日

編集・発行 富田林市遺跡調査会

住 所 富田林市常盤町1番1号

印 刷 橋本印刷株式会社

2005. 300

